

# 歌曲にみる「まち」表現のシニフィアンとシニフィエからの分析

—ジャパニーズ・ロックを事例として—

飯塚深久\*・池庄司（大島）規江\*\*

\*常総市立岡田小学校教諭, \*\*茨城大学教育学部

本稿は空間的広がりを持たない文字テキストのうちジャパニーズ・ロックの歌曲を対象として、「まち」という舞台（空間）がいかなる情緒や想いと結びついているのかについて、記号表現というシニフィアンと記号内容というシニフィエの二つに焦点を当てながら分析を試みた。その際、研究対象時期を2000年以降とし、2000年代と2010年代に区分して、B'zとMr.Childrenの全歌曲について分析・考察した。分析の結果、2000年代においてはB'zの歌曲タイトルという記号表現と「まち」表現とが結び付いていないこと、他方、Mr.Childrenの歌曲タイトルは「まち」と何らかのかたちで結び付いた記号表現として出現していることが明らかとなった。また、記号内容としての歌詞の分析からは、B'zとMr.Childrenに共通して、倦怠感や孤独感といったネガティブな感情を持ちながら「まち」で生活する様子を綴っている。そうしたネガティブな感情に立ち向かう意思や自らを鼓舞するような表現も両グループの歌詞に通底している。2010年代になると、両グループともに歌曲のタイトルの付し方に変化が見られるが、2000年代と変わらず、B'zのタイトルでは「まち」表現との関連が弱いこと、そしてMr.Childrenのそれでは日本語タイトルが「まち」表現の記号表現として働いていることが改めて確認された。一方の記号内容としての歌詞分析からは、両グループともに、2000年代に見られた倦怠感や孤独感といったネガティブな雰囲気や纏った歌詞が消えた。また、B'zの「まち」表現の曲においては過去・現在・未来のいずれかを歌っている一方で、Mr.Childrenのそれにおいては現在・未来のいずれかに想いを馳せるかのような歌詞となった。

キーワード：歌詞、まち、シニフィアン、シニフィエ、ジャパニーズ・ロック

## I はじめに

ドイツの地理学者Schaeferは地理学における例外主義を批判するとともに、普遍的法則を探索すべきと主張した (Schaefer, 1953)。この地理学の在り方に関する問題提起を受けて、地理学は場所や地域の特異性を描き出す「例外主義」から脱却し、他の諸科学と同様に普遍的法則定立を目指すことへの転換を図った。折しものコンピューターの発達と相まって、1950年代から統計データの数理解析を主とする「計量革命」が起こった (高橋ほか, 1976)。しかしながら、次第に無味乾燥な数値の計量分析は、場所に立ち現れる人間性を読み取っていないとの批判が起きる。その端緒となったのがトゥアンの『トポフィリア』(1974) とレルフの『場

所の現象学』(1976) である。トゥアンは個や集団が持つ主観に着目しながら、彼らが持つ「場所への愛着」を論じた。一方でレルフは人間によって認知される「場所のアイデンティティ」という概念を導入し、それを有さない場所の「没場所性」について論じた。トゥアンの主観やレルフの認知といった人間を介在した要素を分析対象とする研究は、人文主義地理学の源流となっていった。1980年代に入ると人文主義地理学のなかに、人間を取り巻く物質的世界に埋め込まれた文化表象をテキストとして解釈しようとする研究が登場する (ハバードほか, 2018)。形態、景観、建築、絵画、映画、文学などのテキストに刻印された当該文化における社会的意味の解釈は、人文科学および社会科学全般にみられた文化論的転回の潮流とも相